

備陽史探訪

第49号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

福山の中世山城

会長 田口 義之

このところ、ちょっとした山城ブームである。我々の会でも、例会で山城の見学を取り入れると、必ずと言ってよい程、多くの熱心な参加者が集まる。

私が山城に興味を持ったのは、中学三年の頃である。もう十数年前になつてしまつたが、初めて山城を訪れた時の感動が昨日のことのように思い出される。

山城ほど、歴史を身近に感じられる遺跡はない。誰でも手軽に訪ねられるし、もしかしたら、その山城の城主は自分達の先祖かも知れないのだ。以下は、簡単な福山地方の山城に関する覚え書きである。山城歩きの手標にして欲しい。

最古の山城は？

山城の起源は古く、原始的なものは弥生時代に逆上るものもあるよう

である。

いったい福山地方には、いつ頃から山城が築かれるようになったのだろうか。素朴な疑問だが、難問である。

平安末、武士が地方で勢力を持つようになると、福山地方でも山城が築かれるようになったと思うのだが、記録で確認することはできない。

伝承では、赤坂町の川上城が平安後期の寛和年中（九八五〜八七）に村上河内守によつて築城されたといふが事実かどうか疑わしい。

ほぼ事実と認められるのは、鎌倉初期に築城されたと伝えられる、駅家町服部の泉山城や、本郷町の大場山城の事例である。

泉山城は、服部谷の奥まつたところに築かれ比高七〇メートル程の山城で、初代備後守護土肥実平の築城を伝えている。山上に郭跡と空堀、南麓に土居の地名も残り、土肥実平時代まで逆上るかどうかは今後の課題だが比較的古い時期の山城の特色

を残している。

大場山城は、新庄本郷の地頭に任命された大庭三郎景連が建保元年（一一一三）に築いたと伝え、山上には、郭跡、土塁、空堀が見事に残り、福山市内では代表的な山城の一つである。ただし、この城の場合、戦国末期まで有力豪族の居城として使用されたため、今残る遺構は戦国期の完成された時期のもので、大庭氏時代のものがどれだけの規模だったかは発掘調査によらなければはっきりわからない。

大場山城に限らず、山城を見る場合注意しなければならないのは、現在残る遺構は廃城時点のものであつて築城時のものではないということである。有力な山城は、時代につれて改造されており記録や伝承上の年代と、現在残る遺構を安易に結びつけるのは厳につつしむべきである。

福山の代表的山城

これから山城歩きを初めようとする方のために、福山地方の代表的な山城を何ヶ所か紹介しておこう。
（一乗山城） 熊野町の東南、福山市上水道水源地の上にそびえる三角形の小山が一乗山城跡。戦国時代、渡辺氏が拠つた山城で、小規模ながら、手入れが行き届いており、初め

て山城に挑戦する初心者にとっては手頃な山城である。山頂本丸を中心に、輪状に帯郭がめぐられ、石垣、井戸、空堀も残り、足ならしにもつてこいである。

（銀山城） 市内でもっとも規模の大きな山城の一つで山頂本丸を中心に南北と、東西に階段状に郭跡が残り、要所には石垣、土塁が築かれている。又、本丸には礎石も存在し、相当な建築物があつたものと推定される。

城主杉原氏は、備南の有力豪族で、戦国期にこの城に生まれた杉原盛重は、後に神辺城主となつて備南の盟主的存在となる。

（志川滝山城） 志川滝山合戦で有名な城で、加茂町北山の谷奥に遺構が残る。比高三百米余の峻険な山城で、山頂本丸と、東に突き出た二の丸（？）は、西側山続きを除き、絶壁で囲まれ、落城したのが不思議なくらいの要塞である。天文二十一年（一五五二）七月二十三日、宮入道光音の籠るこの城を、毛利元就は、三千八百余騎の軍勢で攻撃、一日の合戦で城は落ちた。戦国福山の掉尾をかざつた山城である。

和智元郷と村上武吉の起請文

堤 勝義

和智氏は広沢氏の一族で、江田氏と同族である。現在の双三郡吉舎町を拠点(南天山城)とした武將である。

永祿六年(一五六三)和智氏に招待された後で、毛利隆元(元就の長子)が急死したことにより、和智が毒殺

したのではないかという嫌疑を受けた。毛利は和智に対して不信の気持を

持ち続けていたが、そく行動には移らなかった。というのは、永祿六年

は、毛利は尼子の攻略に一生懸命の状態で、和智のほうには気がまわら

なかったのではないかと思われる。

その後、永祿九年(一五六六)に毛利は尼子を攻略し、中国地方最大の戦

国大名になった。そして、永祿十二年(一五六九)になり、和智誠春、弟元

家(久豊)は厳島において毛利に誅殺された。

和智元郷(誠春の長子、毛利に許されて和智の家督をついだ)が毛利に出した起請文は誠春・元家が誅殺された前年の永祿十一年のものである。

村上武吉(城山三郎の小説に「村上武吉と秀吉」がある村上水軍の頭

領)の起請文は、和智元郷の起請文の二年後の永祿十三年のものである。和智元郷と村上武吉が毛利に出した起請文が対象的なので、比較をしてみたい。

和智元郷起請文

和智少輔九郎

元就様参人々御中 元郷

一筆申上候、我等内證之儀、淵底

肩存知之儀候之間、可被申上候

就夫、彌心底之儀可申上之由、肩

被申聞候之間、乍恐心底不殘申上

候、左候間、三戸造意之儀候之處、

得御意、以御光申付候、誠本望此

事候、於御恩賞者、更難申盡、忝

存候、乍勿論、我等於身上者、元

就様ならでは奉頼方無御座候之間、

御厚恩之段、到子孫申傳、存忘間

敷候、少茂不存別儀、無二之可為

覚悟候、此等之趣、輝元様へも被

仰達候て可被下候、若右之趣於偽

者

梵天、帝釋、四大天王、惣而日本

國中六拾余州大小神祇、殊氏神明、

當國厳島大明神、吉舎両社明神、

悉備後国一宮大明神、各可蒙御爵

者也、仍起請文如件

永祿拾壹年 元郷(花押)

二月十六日 元就様参人々御中

(毛利家文書之一、二四一号)

元郷は毛利元就に対して、心底か

ら申し上げますと書いて、元就に対

しての忠誠を誓っていて、我等身上

は、元就様に頼るはかすべがなく、

御厚恩は子孫に至るまで申し伝えま

すとあり、哀切をおびて、切々と元

就に訴えている。

元郷が起請した神々は、厳島大明

神(安芸一宮、毛利の崇拜する神社)、

吉舎両社明神(和智氏の崇拜する神

社)、備後一宮大明神(吉備津神社)

があり、和智の崇拜する吉舎明神を

厳島神社の低位にもつてきて、毛利

元就に対して配下の礼をとっている。

和智元郷は毛利との関係がせっぱ

つまった状況になっているのを感じ

て此の起請文を出したと思われる。

村上武吉起請文

起請文

一、対元就輝元江申、不相替、無

二馳走可申事

二、自然申隔方候者、可預御尋事

右有偽者

梵天、太釋、四大天王、惣日本国

中六拾余州大小神祇、別而三島大

明神、八幡大菩薩、天満大自在天

神部類眷属神爵冥爵、各可罷蒙候

也、仍起請文如件 村上掃部頭

永祿十三年九月廿日

源武吉(花押)

毛利少輔太郎殿 人々御中

毛利右馬頭殿 参

(毛利家文書之一、二四四号)

村上武吉は輝元・元就に対して無

二の馳走を誓っている。村上武吉が

起請する神々は、三島明神、八幡大

菩薩(村上武吉の崇拜する神社と神)、

天満大自在天神等となっているが、

毛利の崇拜する厳島神社はなく、自

己の崇拜する神社のみを書いている。

和智元郷のように心底から配下の

礼をとつてなく、今は元就・輝元に

対して無二の馳走を誓うが、決っし

てあなたの配下にはなっていないよ

ということを村上武吉は、元就に対

して示しているように思われる。

村上武吉の起請文をみた元就は、

村上武吉が、今は無二の馳走を誓っ

ているが、毛利の配下ではなく、暫

つ心変わりがあるかもわからないと感

じ、恩賞等もはずまねばならないと

思っていたのではないだろうか。

和智元郷の家をつぶされてはいけ

ないという、せっぱつまつた気持と、

村上武吉の村上水軍のおかれていた

余裕の状況とがみてとれて興味深い。

※ 起請文に花押血判をしているが、此の時代はこれが形式であった。

もう少し前の時代には花押のみで、血判はなかった。

みやげ話に 秋の旅に参加して

猪原 安子

朝七時、一人・二人と人が集まり始めました。七時五〇分、遅れる人なく神谷先生に見送られてそろって出発。新幹線の中では部屋割を書いたカードをもらって、だれと一緒かなど気になります。途中、窓からみえるお城の事など聞いたりしているうちに博多へ到着です。ここからはバスで行くのです。

まず向かうところは吉野ケ里遺跡。まだかまだかと気がせきます。現地では高島先生が説明してくださいませ。弥生時代の環濠集落と云うことです。弥生時代の環濠集落と云うことですから、集落の回りに濠が巡らしてあるのですが、想像していたよりもずっと広いのです。濠に沿ってその外側に柵を巡らせてあります。つまり、柵の内側に溝が堀ってあるのです。まるで動物園のオリのようです。どうしてそうなのかは解らないとのこと。集落の中にそびえる高さのある物見櫓は、発掘した穴の大きさを考えて柱の太さや高さを決め、

形はほかの遺跡から出てきた何やらに書かれてあった絵をもとにしたとか。柱の直径五〇センチ、高さは一五メートルほど、地下に埋めてある部分が一・五メートルほど。そばにある竪穴式住居には入ってもかまわないのですが、この櫓には上ることができませんでした。外濠の外には高床式倉庫があります。高床式倉庫と言えばネズミ返しがあるものと思っていたのですがこの倉庫にはありません。そばでは木材は広葉樹だろうか針葉樹だろうかと話している人もいます。それから、展示室に入

って遺跡の縮小模型を見たりしたのですが残念ながら時間がないので、ゆっくりしてはいただけません。最後に甕棺墓列と墳丘墓とをみました。甕棺は一万個以上も埋まっています。そこから推定して千人位の人口が何代かにわたって生活していたらしいのです。これでおしまいとなることを高島先生の案内で実際の発掘現場も見学させてもらいました。立ち入り禁止の有針鉄線はずして現場に入ったので、近くにいた係のおじさんに注意されてしまいました。返して「高島先生の案内で……」と言

せんが、予定より三〇分遅れて吉野ケ里を発ちます。

次に行くのは名護屋城。ここは一六世紀末、秀吉が朝鮮出兵の本拠をおいた所で、全国から参じた武将たちの陣屋を含めると広大な範圍に及んでいます。目的地的かなり手前から道沿いに石垣が見られたり、何某の陣屋跡というのがあります。名護屋城の本丸、天守台跡に立てば見晴らしもよく、諸武将が「我ここに有り」と旗を立て陣を構えた景色はさぞかし壮観であったことでしょう。

あちこちで石垣が崩されたのを復元する作業に取り掛かっています。石垣の工事は色々な人が分けて受け持ったので、あるところは大きな石を積み、またあるところでは小さな石を積んであります。

名護屋城を出て一路嬉野へと思いきや、ここまで来て唐津城を見逃すのはもったいないと、運転手さんに頼み込んで唐津城へ廻ります。名目がトイレ休憩なので下から見上げてみるばかり。

さて翌日は雨。合羽を着せられては柳川の川下りに一層情緒が加わるとはいきかねます。

合羽着て川を下れば
岸からは 石の河童が眺めおり

石垣に目をやれば
そこここに そぐわぬ程の鮮やかさ
ピンク色のは 田にしの卵なり
上り来る舟には花嫁花婿睦まじく
見知らぬ人に幸あれぞかし

さて、岸に上がって昼食をいただき、御花を見学し、詩人であり歌人もあった北原白秋の生家を訪れます。久しく詩集を紐解くことも無ければ、白秋の詩を見ても心に響くものはありません。澄んだ心で詩の世界に入って行けるなら……。

次に、そしてこれが最後の見学地となったのですが、訪ねたところは岩戸山古墳。この古墳は筑紫国造磐井の造った墓だと言われています。

大ききもさることながら、珍しいのは石人・石馬。埴輪ではなく、石で人や馬をかたどつてあるのです。馬の首がないのは、大和の軍勢が磐井氏を押しつぶした時以来のことでしょうか、哀れです。その石人・石馬の並ぶ「別区」と呼ばれる広場から前方部へ歩を進めれば、雨上がりのすがすがしさを満喫できるようです。それから近くの資料館でこの付近、八女市あたりの古墳の分布模型を見たりして帰途につきました。

旅に想う

熊谷 操子

目の前に突然展開した吉野ケ里の楼観と城柵。その物々しさに圧倒されて、カメラさえしばし呆然としていた。予想外のその広さを囲う環壕跡を覗いているうちに、戦鬪的性格を充分にはらんだ「クニ」が見えて来た。「壕にはきつと逆茂木があつたに違いない」と思った。「高島先生にお聞きしましょうか」「恥ずかしいなあ」「聞くは当座の恥、聞かぬは……」と、私の中で誰かが囁く。思い切つて随分思い切つてそつと質問してみた。「はい、環壕の斜面に逆茂木の跡と思われる穴が無数に見つかりましたよ」と快答を得る事が出来た。嬉しかったなあ、もう。

一寸先は聞か言われている考古学、八女をかたっぱしからトレンチして発掘して見れば、若しかしたら確証を握る事が出来るかも知れない。けれども今のところ、私の中のヤマト説は、いんじり動きもしない。それにしても、七田忠昭先生、お父さんの果たし得なかつた夢をここに実現され、その喜びは私達人にも少

しは理解出来るような気がする。高島忠平先生、七田忠昭先生、吉野ケ里を本当にありがとう御座いますた。

城跡に佇つてみると、大関の睨んだ海は素晴しかった。国民的英雄、秀吉の野望を満載した船が脚下に見えるようだ。「加唐島、松島、馬渡島つてどれでしょう」と、ガイドさんに聞いたが確答は得られなかつた。城跡には特に暗い自分だから、旅の前から名護屋城を予習していた。

勿論、月斗の句もメモした筈なのに全然頭に残っていない。句碑の前の五六人がけんけんごうごう。その下の五の結語の文字の行書が達筆過ぎて解からない。ハングル文字みたい。なりだ。けりだ。かなだ。と諸説を撒き散らして城を下りた。結局、かな、を思い当てたのは、雁も鳩も飛び立つた後も後、宿でそつと予習ノートを開いた時だった。痴呆症状の悪化は、もう手の施しようもない。青木さん御免なさい。私めに予習の必要などあらばこそである。

物部麁鹿火の兵士が、敗戦を察知して山に逃げた磐井を捕える事の出来なかつた口惜しさに、そこに佇つていた石人の手を折り、石馬の首をはねたと言う。八女丘陵に佇つた時

「あつ、これが件の石馬(複製)」

始めて観る事の出来た喜びがヒタヒタと押し寄せてきた。扁平石人も珍しい。ユニークな奥目をじつと見つめているうちに、それを彫つた石工達の熱い想いがジンジン伝つて来る気がした。そして反骨精神が満ち満ちていただろう磐井が、一年半もヤマト政権を手古ずらしたエネルギーはいつた何だろうと考えた。南朝鮮がすっかりからんでいた事もあつただろう。九州北部に早くから定住していた渡来人達の意向も大切にしていたからでもある。しかし、何よりも大きいのは、地方豪族の枠を遥かに越えた磐井への支持ではなからうか。寿墓の横に物々しい「別区」まで設けていたというから、人間磐井の内に潜む力の凄さが感じられてならない。正に九州の王者である。結局、戦には破れたけれど、ヤマト政権よりも磐井の方が、外交政治に關しては、一枚も二枚も上に先見の明があつたのではないかと思う。被葬者がもう解明出来ているのなら、この墳墓はもうあばかずに置いて欲しいという気がしないでもない。連想が飛躍して、百家争鳴の継体天皇の出自までが又々気になり始めた。こうして古代幻想に浸るひとときが

私は大好きである。

「これを着て下さい」と、係員がビニールの合羽を被せてくれた。魏志倭人伝に、倭人の着物の事を「衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貸きてこれを衣る」とある。ちょうどそんな感じの合羽である。最近とみにたわわに実り始めたオッパイと下腹が私めの身長の延びをはぐんでいらいらしい。？このするめいかみたいな合羽は大変長くて、「殿中でござる」みたいに引きずりそう。仕方がないのでつまみ上げて、肩かっぱからげエてエ〜三度笠月と、小声で唄いながら舟中の客となる。するめいかの下には、金も入っていないバッグと、役を下ろされた傘が鎮座ましましている。そば降る雨に身を任せている。柳と萩が、なまこ壁をより一層美しく見せて、雨の川下りもなかなか風情があつていい。このような雨を白秋は、「利久ねずみの雨」と表現したのだろう。川の中程の楼観から、商魂が逞しくレンズを向けている。若しこの写真を買わされる羽目になるのなら美貌をしっかりと見せておかねばと、するめいかのフードをやら外してにっこり笑つて見せる。私めも女であつた。川の十字路では、

水がどのようにうろたえているだろうと、楽しみながら水面を探したけれど何の事もなかった。不思議な川である。美しい絵の中を迂るように棹さす舟の中でも、中西さんの例の「お得意」が度々飛び出しては私達を爆笑に導く。鮮やかな棹さばきを観せてくれたこの舟は、御馳走が待っていてくれる「お花」の裏に目出度く着地して、するめいかの楽しい舟旅は終わった。十二三あったと思

う橋に、それぞれ面白い、可愛い、美しい名前がついていて、それらをもみんな読んだ善なのに、今はその一つさえも覚えていない。嗚呼。

今回の旅で、三味線貝を二度観る事が出来た。柳川の魚屋の店先で、シャミセンガイ。シャミセンガイとつぶやいているうちに、思い出した。来日したその日に大森貝塚を発見したことで有名な、あのエドワード・モース氏の事を。明治十年、モースが来日した大きい目的は、海の砂に潜って住む擬軟体のこのシャミセンガイを研究する事であった。動物学者であるモースの心を捉えて離さなかったのが、みみずのような小さな腕足なのだと思うと、その奇怪な恰好がとても愛らしくさえ思えてくるのだった。

私はいつも思う。モース氏の持つ旺盛な智識欲と、鋭いまでの観察眼に、ほんのちよっぴりでも近付けたらいいなあと。

壘棺へ喜ぶ詫びる考古学

説明をガイドも聞いている名護屋城 岩戸山帰途は馬刺しと決めてある 軽そうに棹さす船頭汗を拭き モース氏を捉えた尻尾ここにあり

十月例会を終えて

種本 実

十月十四日の例会には五十八名の方々が参加下さり盛会となりました事及び、見学先の長川寺・浄光寺・明王院・円殊院の各寺院には御多用の中大変お世話になりました事を振り返りつつ、担当者として大変うれしく思っているところで。

今度の鴨方町史跡巡りは三月の総会の後の役員会において決ったのですが、下見や資料の収集は八月末からとなりました。多勢の参加いただいた方々のご期待にどの程度かなえる事ができたかを考えると、まだまだ不勉強であったと痛感します。

とはいえ、私個人にとりましては今度の例会を担当するに当たり、多

くの事を勉強させていただきました。資料の書き方、お寺、資料館等へ見学のお願いに行く時の主旨説明、足利十五代将軍と守護大名、備中及び備後の戦国時代等々これからも引き続いて学習し次回へ備えようと思っ

山城へ居城することになるも八代目元通の時毛利氏に従い長州へ転封となり備中はやがて池田藩の時代を迎えることとなります。

今度の例会の中で私は鴨山城主八代細川氏の譜系を追いつつ、戦国期における定、即実力がすべての厳しい現実を垣間見た思いがしました。足利十五代とはいえ、江戸期徳川氏の十五代には足元にも及ばない貧弱な室町幕府において形骸化した将軍に代り幕政を司った管領細川氏の一族として備中及び伊予宇麻郡(川之江市)・新居郡の守護職を世襲し、その屋形として鴨山城を築きながらも畿内で管領家に従った備中細川氏。

ともあれ、細川氏一族は私にとっ

しかし、下克上の風雲の中、西から大内氏に代り毛利氏が、東は赤松浦上氏に代る宇喜多氏が、北は尼子氏が各勢力を備中に交える状態となり、中央で管領細川氏も家臣三好氏に追放されるに及んで、鴨山城主七代目通董は母の里伊予川之江城に留城をするに致りました。

下見などご同行いただける方はご連絡下さい。(十月二十七日記)

第四十六回中世を読む会

(城郭研究会主催)

テーマ 戦国武家文書を読む

〓 庄原市甲山城主山内首藤家文書をテキストにして〓

(時) 十二月二十一日(金)

午後七時〜九時

(場所) 福山中央公民館

(会費) 無料、参加自由

(問い合わせ) 出内博都 ☎55-0535

歴民研部会探訪に

参加して(その二)

南宮神社と花はアジサイ神宮寺

小島 袈裟春

栗柄町の入口、芦田川に架かる扇橋の南詰交差点を過ぎた所に……アジサイの寺、神宮寺……と書いた看板が立って居た。車の助手席の案内が「アラ、アジサイ寺って神宮寺だったのね」と云った、「そうらしいな」と運転していた私、更に南に行った所に神宮寺への小さな案内板があつて、それに従がつて右折して行くと男の人が手を振つて誘導して呉れた、?備陽史探訪会の見学で案内者が出て居るとも思えないが……と考へて居る内に鳥居が見え付近の人ばかりと赤いノボリを眼にして、やつと事態が呑み込めたのであつた。何んとも間の抜けたと云うか世間知らずと云うか、まあそれ故に探訪会を頼りにして居るのだが……実は今日(六月二十四日)は孫の誕生祝で、家で昼食会をしたのであるがその時娘達が「アジサイ寺もあるらしいわよ」、「どこにあるのかな」、「さあー」と、云う様な会話があつて冒頭の家の驚きになるのだが……五

月はサツキ寺、六月はアジサイ寺、と企画した種本部会長の意図が全く察知出来ない私達に、今日がそのアジサイ祭りの当日だなんて想像出来なかつたのも致し方ない事であつた。待つ事しばらく、やつとスペースの出来た駐車場に車を入れて、かなりの人出と、蒸し暑さの中でアジサイを觀賞しながら寺の門を入ると、本堂の中では多数の信者に囲まれた数人の僧侶の読経の音が、一段と高くなつてアジサイ祭りは最高潮であつた。少し早目に着いたので境内で写真撮つたり、臨時の売店を眺めたりして汗を拭つて居ると、種本さん始め顔なじみの方々が到着して、本日公開の資料館から見学する事になった。神宮寺の開基は寺の資料によると、大同二年(八〇七年)に南宮神社が創建され同時にその別当寺として神宮寺が建立されたのである。これが史実であるかどうかは別の問題として、こうした神仏混淆の形態は、初期の仏寺の鎮守として神を祀る、次に神宮の別当として寺を建てる、そして神宮と別当寺を同時に建てる、と云う順序で進化した、と私は考へるのだが、それと共に大同年中より百年余り後に撰上された延喜式(施行は更に四十年遅れた康保四

年、九六七年)に、神宮寺まで付いた大社が、小社ばかりの備後式内社の中で脱落(現新市町の吉備津神社も同様)して居るとは思へぬ事、等から開基は十世紀後半以降と考へられぬ事もない、水野記には永久四年(一一一六年)とあると云う。それはとも角、資料館に展示してある巨大な鬼瓦を見ると、初期の神宮寺の堂々たる姿が私しの想像をかき立てる。又館内には近くの平井古墳出土と云う三本の鉄剣や馬具、須恵器の立派な鉢、高杯、器台等見ごたえ十分の物が多し、唯古墳の場所を示す地図がなかった。栗柄町には他にも古墳や廃寺跡がある筈なので町全体の地図があつたら、と惜まれた、そしてもう一つ、超目玉とも云うべき県の重文、大般若経六百巻が三つの櫃と共に展示してあつた。応永二十九(一四二二年)京都相国寺の沙門中高と云う僧の発願によつて南宮神社に奉納されたものと、ある。寺のパンフには、大般若経そのものは特に珍らしくはないが、六百巻が完全に揃ひ、櫃まで残つて居るのは全国でも稀であるとする。私しもさもあると、始めて見る大般若経の巻物に目を凝らしたのであつた。大般若経は県の東北部でも、油木町

油木八幡神社の五一四巻、東城町法恩寺の六百巻、久井町稻生神社の六百巻、庄原市龍福寺の一五三巻、比和町慶雲寺の六百巻、世羅町永寿寺の三九三巻、尾道市栗原八幡神社の一一二帖、三原市正法寺の巻数不明、君田村杵築神社の一三五巻、(広島県の地名による)等があるが、ざつと見て気が付くのは仏典でありながら神社に残るものが意外に多い事である。これは神仏混淆の宗教思想から神社に奉納されたものが、明治の神仏分離令にも拘わらず神社に秘藏されたものと思うが、では何故大般若経が仏寺のみならず神社へも奉納されたのか……十五世紀前後、朝鮮半島から大般若経が大量に輸入された事ともからみ合せ誠に興味深い問題である。これを解く鍵は何よりも先ずこの経典を精読する事から始めねばならぬが、何せ総量六百巻、日暮れて道遠し……入口で戸惑う私であつた。

……南宮神社……謎の多い神社である。現在の祭神は、いざなぎの命、いざなみの命、金山彦命としてあるが、「広島県の地名」によると近世初期の水野記には孝安天皇の四女、吉備津彦命の姨とある。江戸期の備陽六郡志及び福山志料では孝靈天皇

並びに吉備津彦命とし、同時代の西備名区では孝霊天皇、いざなぎの命、いざなみの命、金山彦命の四座が正殿に並列して居る、と記し何ともマチマチである。又南宮と云う変わった社名にしても前記の西備名区では神社啓蒙等の説を引いて、主祭神は金山彦命、その方角は南であるから美濃国の一宮と同様に南宮神社としたのであろうと記し、福山志料では美濃一宮よりの祭神勧請を別説と認めながらも、単純明快に（現新市町の）一宮と祭神は同じで一宮より南に在るから南宮神社と称するとある。

何やら混沌として来たが、備陽六郡志の中の「戸木の竜王の上の山を加治屋敷と云う鉄くる加治炭等土中に多し」との記事は場所不明だが示唆に富む。余りこだわり度くはないがもう一つ、この神社の祭神に関連すると思われる孝霊天皇の御陵と墓と伝える宝篋印塔が気にかゝる。

この御陵の存在は前出の備陽六郡志にも伝承として図示してあるから、古伝である事は間違いない。私は暑い中を神社の東の尾根を上下し散々探し廻った末やっと見付け出した。人頭大の河原石を方形に二重に積んだ基壇の上に土盛りし初段の向って左に宝篋印塔、右に石仏が置いてあ

った。基壇の右下に「孝霊天皇御陵伝説地」と彫った石柱が立って居た。まあ現在において天皇陵が栗柄町にあるなんて誰も信用しないに違いない。第一神社関係者や神宮寺の人も信じて居ない？其の証拠に道案内の矢印もなかった。……

しかし私は別の意味で大変重要な「伝承」だ、と考える。一つは南宮神社の主祭神に関連する事と、二つは昔から備後国の辺りには孝霊天皇の伝承が数多い事である。現新市町の一宮も社名は吉備津彦命と祭神は孝霊天皇と大吉備津彦命と同列である事にも注意し度い。大体古代の天皇の陵が現在宮内庁で管理して居るものと、そのまゝ同一である。などとは歴史学者の方々も思っていないに違いない。神武陵を引合に出すまでもなくすべて「伝承」なのである。栗柄町の「孝霊陵」も立派に御陵なのである。供養墓も墓なのである。堂々と胸を張って古人の造作物を主張してもらい度い。……私にはある時代に孝霊帝を祖神と戴く人々が備後の地で勢力を盛返して来たと考え、或いは政治的圧力が立去ったのかも知れない。その人々は孝霊天皇や吉備津彦命を祀る、吉備族の世が来たのである。供養墓を作っ

ても不思議ではない。……神は祀る人々と共に栄え、人々によって消えても行く。そうなのだ、この地にはそれ以前にも神々はあった、そして又それ以後にも神々は現われる。地誌以来の南宮神社の祭神の混乱は、それ等神々の苦悩の代弁なのでもある。（一九九〇年七月）

永遠に

藤代 由子

古墳の主よ
永久に逢える事もないのに
私達は毎年あなたの許に
訪れる 何がどうして
引き付けるのか

声もないのに 古墳の主よ
私の耳許にそっとささやいて下さい
私はあなたを見つめています
聞える事もない 私の声を
風の中に聞いて下さい

若い乙女のように胸をおどらせ
すばらしい主の姿を夢に見る
そっと古墳の上へ
きれいな花を捧げましょう
一刻（とき）のさざめきを 主よ
聞いて目覚めて下さい

皆が去り静けさが返った時
主よ 語り合うのは 誰

短歌

木曾 直之

（吉野ケ里）
吉野ケ里遺跡に立てば大古なる
暮しのさまの臉に浮ぶ

いにしへに栄えしくにの吉野ケ里
卑弥呼の姿ふとも思へり

浮びては消えてうつつに姿なき
大古の人の暮しやいかに

望楼の大きに吾は圧倒さるる

「弥生期」の人らいかに 造れる

（名護屋城跡）

海峡をはるか彼方に見つめ立ち
百済にらみしか名護屋城は

呼子なる岬遠近の城のあと

名護屋城址の守り堅しか

玄海の荒波よせる呼子浜の
望洋たる岬に立ちつくすなり

呼子なる浜に押し寄す玄海の

荒波鎮めしや名護屋の城は

砕け散る波は百済の大軍か
名護屋城址の今も毅然と

十二月例会 山城歩きパートⅢ

バスツアー

戦国和智氏の山城を訪ねて

講師 当会長 田口義之

時 一二月二日(日)

午前八時 福山駅北口キャッスルホテル集合。

午後五時 福山駅解散予定。

主な見学地

南天山城跡(双三郡吉舎町)
：鎌倉御家人に出自を持つ備北の雄族和智氏が南北朝時代に築き、戦国末期まで居城した。規模雄大な戦国山城で現在の吉舎の町はその城下町として発達した。

善逝寺(同)：禅宗、正覚山と号す。和智六代筑前守時実が創建、氏寺とした。

大慈寺(同)：和智氏の五代信濃守氏実が仏通寺愚中周及の高弟宗綱を開山に迎えて応永二八年に創建。和智氏実墓、同画像を蔵し仏殿は永禄一二年、和智一二代元郷が再建したもの。

会費

会員 三二〇〇円
一般 三五〇〇円

定員 四五名
申し込み

事務局まで電話か葉書でお申し込み下さい。
但し、受付開始は一月一日、定員に達し次第締め切りです。

備考 雨天決行、弁当持参、山歩き出来る服装で。

事務局日誌

七月二十九日 座談会 参加四十人
邪馬台国論争
八月五日 広島県歴史団体協議会 参加 四人
八月二十六日 事務局会議 参加十人
九月九日 講演会 参加四十人

歴史講演会・忘年会のご案内

平成二年度の締めくくりとして左記の要項で歴史講演会と忘年会を催します。

今回は講師として郷土史研究でも有名な坪生町西楽寺住職内藤快範さんをお招きし、講演の後忘年会に入りたいと思います。

第四十二回歴史講演会

テーマ「歴史から学ぶ」

講師 内藤快範先生

(時) 十二月十六日(日)

午後四時三〇分～五時三〇分

(場所) 福山ワシントンホテル

※聴講無料、参加自由

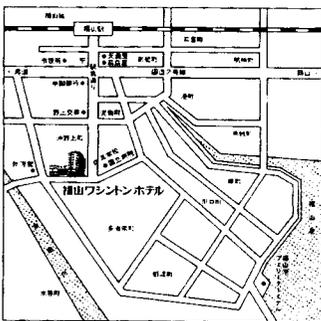
平成二年度忘年会

(時) 十二月十六日(日)

午後六時より(講演会終了後)

(場所) 福山ワシントンホテル

〒720 福山市沖野上町5丁目27番11号
電話(0849)22-5511番



(会費) 六千円
(参加申込) 同封の返信用ハガキで出欠のご返事をお願いします。
締切は十二月十三日です(但し、準備の都合上早めにお願ひします)
※バス、電車でお越しの方は福山駅まで送迎バスがお迎えに参ります。午後四時、福山駅北口キャッスルホテル前にご集合下さい。

藤井一族の興亡 立石定夫先生

同日 役員会 参加十四人

九月二三・二四日 秋期一泊旅行 吉野ヶ里遺跡と名護屋城

参加四十人

十月七日 講演会 参加三十人

川口干拓史 松浦薫雄先生

十月十四日 鴨方町史めぐり

種本実担当

参加五八人

十月二七日 役員会兼事務会議

参加十五人

十月二八日 豊松史跡めぐり

出内博都担当

参加五二人

※同封の葉書に忘年会の参加・不参加を記入の上、来年度の要望・意見等がございましたらぜひともご記入の上、御投函下さい。

※会報原稿募集 二月末日までお願いいたします。

備陽史探訪の会

事務局

〒720 福山市多治米町

五―一九一八

TEL (0849) 53-6157